

マレーシアと聞いてどういうイメージを抱くだろうか？ある人は熱帯の国と答えるかもしれないし、また別の人はツインタワーと答えるかもしれない。その答えは人によって千差万別であるが、私は多民族国家といったイメージが真っ先に浮かんだ。しかし、異邦の地でどのように人々が国を作り上げ、どのような文化・生活を営んでいるのかという点に関して詳しく理解しているとは言いがたい。そこで、マレーシアへ渡航するにあたり、国家の基本的な構成要素である「人」という側面からマレーシアという国を俯瞰したい。

マレーシアは主にマレー系（構成比：50.1%）、中国系（22.6%）、インド系（6.7%）、先住民（11.8%）等からなる多民族国家であり、単民族国家の日本からしてみれば非常に多様性に富んだ国といえる。このような民族の多様性が生まれた背景は19世紀にまで遡る。英国の植民地支配を受けていた4つの州（ペラ、スランゴール、ヌグリ・スンビラン、パパン）からなるマレー連合では、錫鉱山やゴム農園での安価な労働力確保が喫緊の課題として挙げられていた。また、豊富な錫資源に大きな商機を見出した中国系商人がこの地域に殺到した。そのため、中国やインドから大量の移民が産業の担い手として流入した。彼らの中には、祖国での飢餓や自然災害等に苦しんでいた者もあり、よりよい生活、そして一獲千金を目指すというアメリカンドリームならぬマレーシアンドリームを夢見て新たな土地へやってくる者も少なくなかった。彼らの多くは祖国に帰らず定住し、現在の多民族国家マレーシアを生み出すルーツとなった。

民族の多様性は、生活様式や価値観、宗教や言語などの様々な場面においても影響を及ぼしている。国家の大多数を占めるマレー系はイスラム教を信奉しマレー語を話す一方、中国系は仏教や道教などの宗教を信仰し、中国語を日常的に用いている。さらに、インド系の国民は主にヒンドゥー教徒であり、タミル語を話すなど一つの国家の中に独立した共同体があるようにすら思えてしまう。ナジブ首相は民族や信仰に関わらず、国民一人一人が協力してよりよい国づくりを目指そうという“一つのマレーシア”というスローガンを掲げた政策に取り組み、民族調和に腐心している。また、1951年に発表されたバーンズ・レポートではマレー語と英語を中心とした教育制度の確立を目指し、タミル語や中国語を公教育から排除しようとする動きが見られた。これは、各民族が織りなす文化の正当性・多様性という概念を真っ向から否定し、マレー人という1つの民族に同質化させる政策に過ぎないと非マレー系の住民から大きな反発を受けた。このように、マレーシアでは民族や文化の壁を越えて国民統合を目指すという取り組みがなされてきたものの、幾度となく困難に直面してきた。各民族の帰属意識はマレーシアという国ではなく、各民族に存在しているのではないかとさえ思えてしまう。

多民族国家が織りなす社会は文化・価値観・宗教などの面で多様性に富んでいる反面、国民一人一人にとって効用が最大化されるように国家の舵取りを行うことは極めて難しい。その中で、マレーシアという国が現在どのような問題を抱え、解決に向けてどのような取り組みをしているのかということ、今回の渡航で少しでも垣間見ることができたら幸いである。

参考文献

- ・ **Khalim, Z., Norshidah, M. S. (2010).** Ethnic relation among the youth in Malaysia: toward fulfilling the concept of one Malaysia. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, 9, 855-858.
- ・ **多和田 裕司.(1996).** 多民族国家マレーシアにおける「開発政策」と「国民統合」. 長崎大学教養部紀要 (人文・自然科学篇合併号) , **37(1)**, 127-143.
- ・ **中島 史博.(1997).** マレーシアにおける国民統合：言語問題を中心に. *Junior Research Journal*, **4**, 247-272.
- ・ **堀井 健三.(1998).** マレーシア村落社会とブミプトラ政策. 論創社, 366pp.
- ・ “The World Factbook”. アメリカ中央情報局. (2016. 2. 19 アクセス)
<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/my.html>